様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２８０１

研究課題名（和文）日本を超えた日本語教育－海外の大学との遠隔授業を通した共通日本語の可能性を探る－

研究課題名（英文）Japanese language teaching and learning beyond the boundary - Potentials of Japanese as a lingua franca -

研究代表者
小林　幸江（KOBAYASHI, YUKIE）

東京外国語大学・その他部局等・教授

研究者番号：４０１１４７９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：従来の日本語教育では、日本語母語話者の日本語を規範とし、コミュニケーションは、日本人と学習者間でのインターアクションを指す。しかし、今や日本語は日本語母語話者だけの言葉ではなくなってきている。本研究では、日本語非母語話者間でコミュニケーションツールとして用いられる日本語を「共通語としての日本語」と捉え、その実態を探ることを目指した。本研究の結果は、「国際連携・高大連携によるICTを用いた外国語教育と学習者コーパス研究　国際ワークショップ」（2017/7/16於東京外国語大学）、及び「第12回国際日本語教育・日本研究シンポジウム」（2018/12/4　於香港理工大學）において発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の言語規範主義によらない日本語教育の考え方は、従来の枠組みを超えた考え方であり、そのために新たな視点で日本語（含文化、価値観等）をとらえようとするところに独創性があると考える。本研究のテーマは、今後予想される日本の多文化共生社会、ひいては、日本語の国際化に寄与するものであり、日本語教育に新たな領域をもたらすものであると思われる。また、本研究で得られた遠隔討論会のデータ（非母語話者間、非母語話者-母語話者間、母語話者間）は、今後の研究に寄与できるよう、JFLコーパスとしてまとめる予定である。

研究成果の概要（英文）：It is generally believed that Japanese taught to non-native speakers of Japanese should be that of native speakers. As Japan becomes more diverse, Japanese is now a language spoken by non-native speakers. This research defines Japanese used as a communication means among non-native speakers as a Lingua Franca (JFL).The main purpose of this paper is to survey the potential of Japanese as a Lingua Franca aiming at Japanese language teaching and learning beyond this boundary. Data was taken from remote discussions held among non-native speakers by connecting overseas universities through Skype.Research results were presented at the International Workshop held at the Tokyo University of Foreign Studies in 2017, and at the International Symposium held at the Hong Kong Polytechnic University in 2019. This data will be edited as a TUFS JLF corpus for further research.

研究分野：日本語教育

キーワード：JFL（共通語としての日本語）　多様な日本語学習者　言語規範主義によらない日本語教育　日本を超えた日本語教育　遠隔日本語討論会　多文化共生

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来、日本語教育では、日本語は日本語母語話者が話す言葉で、文化（価値観を含む）を抱合したものを指し、それを正統な日本語とし指導してきた。そこでは、日本人母語話者と外国人学習者の二項対立で考えられている。しかし、社会のグローバル化に伴い、国内外の日本語学習者は多様化し、日本語は非母語話者間の共通の言葉としても使われるようになってきている。

２．研究の目的

多様な背景を持つ人々の間でコミュニケーションツールとして用いられる日本語を「共通語としての日本語」（JLF：Japanese as a Lingua Franca）と捉え、次の二つのことを目指した。① JLF の実態・特徴を明らかにし、その可能性を探る。② JLF のための「日本を超えた日本語教育」について考える。

３．研究の方法

本研究に係る先行研究は少ないが、まず JLF に係る文献収集、研究者との意見交換を行い、考え方の根拠となる理論づけの模索を行った。その結果、本研究では、言語規範主義によらない「言語的多様性を支持する日本語、日本語教育」（久保田 2015）の考え方に立脚し研究を進めることとした。

本科研以前から実践している、海外の大学で学ぶ日本語学習間での遠隔授業を継続し、そこからデータを得た。具体的には、東京外国語大学、メルボルン大学、淡江大学、福州大学間で共通の条件のもと、遠隔による日本語討論会を行い、非母語話者間、母語話者－非母語話者間の日本語使用のデータを採取した（母語話者間でも同じ条件で遠隔討論会を行い分析の参考とした）。同時に学習者の日本語使用の意識調査を行った。以上のデータを基に JFL の日本語の実態を探った。

４．研究成果

本研究では、JFL を目指す日本語教育の目的を相互理解に置き、その円滑なコミュニケーションが成り立つために次のような結論を得た。①JFL でもベーシックな日本語力の育成は重要であるが、従来の日本語教育の指導項目及び重点の置き方には再考の余地がある、②ストラテジーの育成に力点を置く必要がある、③言葉と文化は一体であるが、JFL を目指した日本語教育では、「言語に結びついている文化的負荷をなるべく軽くする」（鳥飼 2011）ことが必要である。JFL のための日本語教育の構築は今後の課題となる。

なお、本研究で収集したデータを「JLF コーパス」として言語情報処理が可能なように構築するために、科研終了後も作業を進めている。

〈引用文献〉

久保田竜子（2015）『グローバル化社会と言語教育 ―クリティカルな視点から』　147-168

鳥飼玖美子(2011)『国際共通語としての英語』　講談社現代新書　129-145

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計 3 件）

① 2019/06/01 “Exploring Japanese as a Lingua Franca Through Long Distance Education Tagging and Analyzing Conversation Data” Noboru OYANAGI、Yukie KOBAYASHI、Keiko MOCHIZUKI, Kana SHIMOTORI International Symposium on Diverse Approaches to Second Language Acquisition: Learner

Corpora, Evaluation and Brain Sciences 2019 Tokyo University of Foreign Studies　（国際シンポジウム「第二言語習得研究の新展開： 学習者コーパス・評価・脳科学の協働」）
主催：東京外国語大学 科研基盤B「国際連携・高大連携による双方向英語・中国語・日本語学習者コーパスの研究」（17H02357）

② 2018/12/4　「日本を超えた日本語教育－共通語としての日本語（JFL）の可能性を探る」小林幸江、望月圭子、伊達宏子　「第 12 回国際日本語教教育・日本研究シンポジウム」（香港日本語研究会主催）（於香港理工大學）

③　2017/7/16　「日本を超えた日本語教育－海外の大学との遠隔授業を通して共通日本語の可能性を探る－」小林幸江　「国際連携・高大連携による ICT を用いた外国語教育と学習者コーパス研究　国際ワークショップ」　主催：東京外国語大学　科研基盤 B「国際連携・高大連携による英語・中国語・日本語学習者コーパスの研究」(17H02357)　科研基盤 C「日本を超えた日本語教育－海外の大学との遠隔授業を通して共通日本語の可能性を探る」」(16K02801)

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：望月　圭子
ローマ字氏名：MOCHIZUKI, keiko
所属研究機関名：東京外国語大学
部局名：大学院総合国際学研究院
職名：教授
研究者番号（8 桁）：90219973

研究分担者氏名：　林　俊成
ローマ字氏名：LIN, chunchen
所属研究機関名：東京外国語大学
部局名：大学院国際日本学研究院
職名：教授
研究者番号（8 桁）：70287994

研究分担者氏名：伊達　宏子
ローマ字氏名：DATE, hiroko
所属研究機関名：東京外国語大学
部局名：大学院国際日本学研究院
職名：講師
研究者番号（8 桁）：30759311

(2)研究協力者
研究協力者氏名：豊田　悦子
ローマ字氏名：　TOYODA, etsuko

研究協力者氏名：菊島　和紀
ローマ字氏名：KIKUSHIMA, kazuki

研究協力者氏名：何　美玲
ローマ字氏名：HE, meiling

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。